国語・算数・理科・デザイン！




2021
秋田を、笑え！



akitade.jp
秋田県｜若者と地域をつなぐプロジェクト事業


国語・算数・理科・デザイン！
いいね！
最終成果報告会
ここに完成！
ご注意
本日のプログラムの様子は、SNSで写真を公開・youtubeで配信されます
公開されたくない、映り込みたくない方は、あらかじめ申告スタッフにお声がけください
会場内の撮影はOKですが、発表・お話の最中の撮影はお控えください
にご協力ください
コロナウイルス感染症対策について
・入場時の手指消毒・検温
・マスクの着用
・ソーシャルディスタンスの確保
・イベント後の健康観察
・QRコード登録のお願い
秋田デザイン行事
国語・算数・理科・デザイン！
最終成果報告会
5日［土］13時～16時
配信開始までもうしばらくお待ちください

# 『国語・算数・理科・デザイン！』最終成果BOOK



国語や算数、理科や社会を学ぶみたいに、地域を観察したり、
地域を感じたりする『デザイン』の授業があったらいいのになあ

# ただただ観察する、デザインの旅

日常に溢れている、日々の隅々を『**観察**』することをきっかけに、地域を意識し、地域とつながろうとする感情を育み、そしてその先に何らかの行動・アクションを見出そうと、もがき続けた半年間のデザインプログラム「**国語・算数・理科・デザイン！**」。

今年の観察のテーマはズバリ「**笑い**」。地域に潜む「笑い」の観察を通じて、県内の高校・大学生・社会人の合計14チームが、半年間「**地域とつながるとはどういうことだろう？**」と悩み続けます。そして、その先に自分自身の本当の感情が動き出すまでじっと耐え、待ち続けた〝葛藤の過程〟をそのまま正直に愛で合う姿勢を、本事業では大切にしてきました。

秋田の〝祈り、祭り、暮らし〟という日常がそのままに描かれた、画家・藤田嗣治の『**秋田の行事**』。あの膨大な観察と感情が表現された大きな一枚の絵画が掲げられていた歴史ある場所（現・秋田市文化創造館）で、嘘偽りのない濃厚な半年間の『**秋田のデザインの本音（過程）**』を、地域の方々に見届けていただきたいと実施された、本事業の最終成果記録がこの一冊です。

どこかで見たことのある、いかにも正しそうな答えに頼り逃げることなく、悩み苦しんだ過程をそのままに見せ、曝け出すということは、とても怖くて勇気のいることだと思います。しかし、その不安と葛藤にめげることなく〝**地域とつながる実感**〟を模索し、泥臭く掴み取ろうとした軌跡こそが、参加者全員の成長の証であり、本事業の成果だと信じています。

そんな全14チームが必死に駆け抜けた半年間の軌跡を、たっぷり、そのまま地域の方々に感じていただけたら幸いです。



# 止まらない標識

## Rainbow




## デザインは“言葉”にはじまる

湯沢翔北高校の同じクラスの仲良し3人チーム「Rainbow」。3人は、見過ごしがちな**日々の〝笑い〟の観察を、「交換ノート」で記録・共有するというアイデアを発案**し、「ノート1冊分書き切る！」を目標に半年間の観察とノート交換を続けるも、結局18ページしか埋められず、目標達成のために残りの書ききれなかった白紙のページを引きちぎる（!?）というユーモアで、今年の最終成果報告会のスタートを笑顔で湧かせてくれた。

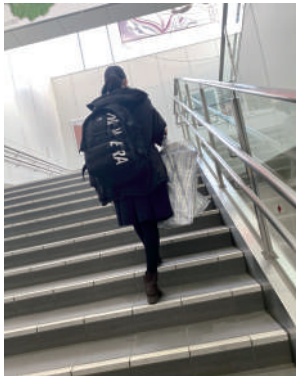
そんな「Rainbow」の関心は、いつも**日々の何気ない瞬間の〝言葉〟**にあった。昼休みに友だちと言い合った「くだらないダジャレ」、学校創立10周年のテーマ募集が「大喜利」みたいになったこと、大好きなカタツムリについて熱心に「言葉で説明しちゃっている自分」に笑えて




Rainbowが観察の記録を
共有するために
作成した交換日記のノート

## 自分以外の人や地域への感情

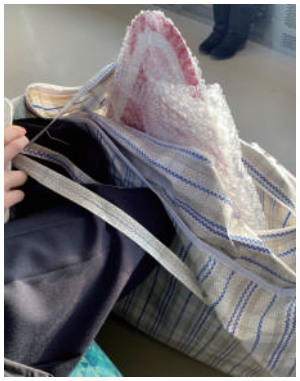





「はいれ」の看板が
実際の現場に
設置されていた様子

写真提供：Rainbow



湯沢駅から
電車に乗って秋田駅まで
重い「はいれ」の
看板を運ぶ様子

写真提供：Rainbow



稲庭うどん販売の東海林社長

写真提供：Rainbow

きたこと、などなど……。半年間〝言葉〟の観察を素直に楽しみ続けた3人は、「交換ノートのおかげで〝3人の笑いのツボ〟が似てきたみたい！」と、嬉しそうに笑って話してくれた。

そんな3人が最終的に心を寄せ、取り組んだテーマは、メンバーの一人である西塚さんが2年前から気になっていたという**「はいれ」と書かれた手作り看板の謎**についてだった。やはり気づけば、この観察のポイントも〝言葉〟という入口に間違いなかった。「誰が作ったの？」「なぜ止まれの標識のデザインなのに〝はいれ〟なの？」そんな素直で、実感のある疑問が浮かび、親に聞いたり、ネットで調べたり、方々に電話をかけまくったり、学校のテストが終わって急いでバスに駆け込み調査に臨んだり……、とにかくかける汗という汗を必死にかきまくって、なんとかその持ち主に辿り着いた3人。

そして、持ち主であり、この看板の制作者である**「稲庭うどん販売」社長の東海林さん**に実際に会うことができ、たくさんのお話をさせてもらった結果、なんと「はいれ」の看板をお借りすることに成功。そうして最終成果報告会の当日、堂々と会場である秋田市文化創造館の一番大きいホールまで、遠い湯沢の地から「はいれ」の看板を手で持ってきてくれたRainbowの3人。その清々しい3人の立ち姿は、運営チームである我々にとって、ずっと忘れられない記憶となった。

自分が気になったことを見過ごさず、自分事として正直にアクションした結果、人との出会いが生まれ、**「他の人にも知ってほしい」「東海林さんにも感謝を伝えたい」という、自分以外の人や地域への感情**が育まれたこと。これが3人の「地域とつながるプロジェクト」の確かな成果だった。

湯沢から電車に乗って、秋田市までずっかくて重い「はいれ」の看板を運んだ手のひらに残る感触と記憶は、これからも3人が地域に気持ちを寄せる原動力になると信じているし、いよいよ彼女たち3人の新しい世界への「はいれ」の大冒険が、ここに始まっていくだろう。

## 「はいれ」の看板を運んだ手のひらに残る感触と記憶という原動力




# 地域の惰性

YOSH //

秋田中央高校から参加した女子3人チーム「YOSH//」が最初に取り組んだ観察のフィールドは、昨年のテーマでもあった〝通学路〟。「道路標識の反射板は、しっかり見えるように貼られていない」と気づいて、もっと反射板を的確にデザインすればいいのにとモヤモヤ……。また雨の日には「学校の入口に水たまりができている。水平だと思っていた道路の路面が、実は水平ではないことに気づいた」と、当たり前に思っていた何気ない日常への認識が、雨（水たまり）の観察によってひっくり返されていく3人。

そうして観察を続けて数カ月、彼女たちはあることに気づく。「私たちが見てきたことは、誰もが日々見ていること。反射板をよく見えるように改善しないのも、水たまりができてしまうような歪んだ道路面を放っておいてしまうのも、見て見ぬ振りをしているだけの〝**地域の惰性**〟だ」と、通学路の観察を深めた先に、〝地域の人々の惰性〟を見出していく3人がそこにはいた。

そして、3人はここで思考を止めない。地域の惰性がそのままで在り得てしまえ





**マンホールと点字ブロックに観る“惰性”**

マンホールの上に点字ブロック？！
マンホールの絵柄と点字の凹凸が重なると
区別がつきにくく、危険なのではないか……
というか、これは印刷のミスでしかないのか……



**放置されたボロボロの自転車に観る“惰性”**

誰がこんなところに自転車を捨てたのか？！
そして、その捨てられた自転車を
そのままに見過ごしている地域の意識とは……

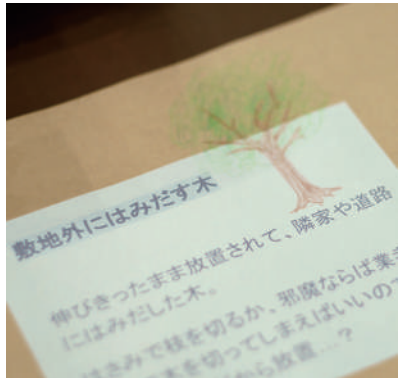
写真提供：YOSH //［Slackへの投稿より］



るのは、他に何か地域の理由があるのかもしれない……と、さらに観察から感じた自分たちの中の感情を冷静に疑い進めていく。そして、そんな彼女たちが行き着いた先は、**一つ一つの地域の惰性の背景には、私たちが知らないことがあり、探ろうもとせず、すぐに〝惰性だ〟と決めつけてしまっていた〝私たち自身も惰性〟なのではないか**……ということだった。そうして、地域の観察から自らの惰性を超えていくには、手前で決めつけることなく、**〝純粋に観察することが大事〟**なのだと3人はいよいよ気づいていく。



## **〝地域の惰性〟の背景には〝私たち自身の観察の惰性〟がある**








最終成果報告会の会場（コタツ）で、しっかり横になりくつろぎ、〝惰性〟を体現する「YOSH//」の3人

最終成果報告会では、会場に来ていた参加者の方々に、彼女たちが見つけてきた〝地域の惰性〟例の数々を見てもらい、**その感想を茶色く塗ったコタツの天板に彫刻刀で彫り込んで残してもらうという仕掛けをデザイン**。ただ感想を書くのではなく、彫刻刀の刃を固い板に何度も当てて削りとる行為を通して、見つけたことの気持ちや言葉を噛み締める、そんなアウトプットのデザインをしてくれた。彼女たちが観察した〝地域の惰性〟を見て感じたことを、その場で手間と時間をかけて彫りながら受け止めていく時間は、〝地域の惰性〟として決めつけていたかもしれない我々自身の惰性をも諌めてくれる。

初めてホームセンターに木の天板を3人で買いに行き、ホームセンターの従業員に90センチ×90センチの大きさにカットしてもらったという初めての経験に、ドキドキしたと喜ぶ彼女たち。そしてそれを自宅に持ち帰って茶色く塗り、新聞にくるんで、家族にわざわざ車で会場まで運んできてもらう……という、その手間と時間を丁寧に費やし、経験し尽くしたJK（女子高生）3人ならば、いよいよ自らの惰性を乗り越え、純粋な目で地域を見届け続けることができるはずである。



## 純粋に観察するということ



# 一人という地域

## 新屋卍會

最終成果報告会が始まる15分ほど前、ギリギリで会場入りした新屋高校2年の大嶋くん。これまでの半年間の過程のことを思うと、最終成果報告会への欠席もあり得るのではないか……と思ってしまった。新屋卍會は、**大嶋くんとクラスメイトとの間での〝関係性（地域）〟を築き、持続させることの難しさを、終始体感してくれたチーム**だった気がする。

去る2021年の7月。大嶋くんは、一人のクラスメイトとともに、本事業の事前説明会に参加してくれていた。しかし本事業へのエントリーの時点では、事前説明会の時に一緒だったクラスメイトとは別の友人である**岡部くん**と参加することになっていた。本事業のエントリーの条件として「2人〜3人までチームが構成されていること」というものが提示されていたなかで、どうしても本事業に参加したいと思っていた大嶋くん。しかし一人ではエントリーできない……という状況のなかで、そんな大嶋くんの気持ちを汲み取って「俺と2人ならエント



第１回集中WS（2021.8.3）に一人で参加してくれた大嶋くん




事前説明会（2021.7.11）に緊張しながらも
参加してくれた大嶋くん（左）




コンビニ「セブンイレブン」のロゴマークは
「なぜ“n”だけ小文字なのか？」
という岡部くんの観察と疑問の投稿

写真提供：新屋卍會［Slackへの投稿より］



中間報告会（2021.12.11）に、２人で参加してくれた岡部くん（左）と大嶋くん

リーできるよね！」と手を差し伸べてくれたのが岡部くん、その人だった。

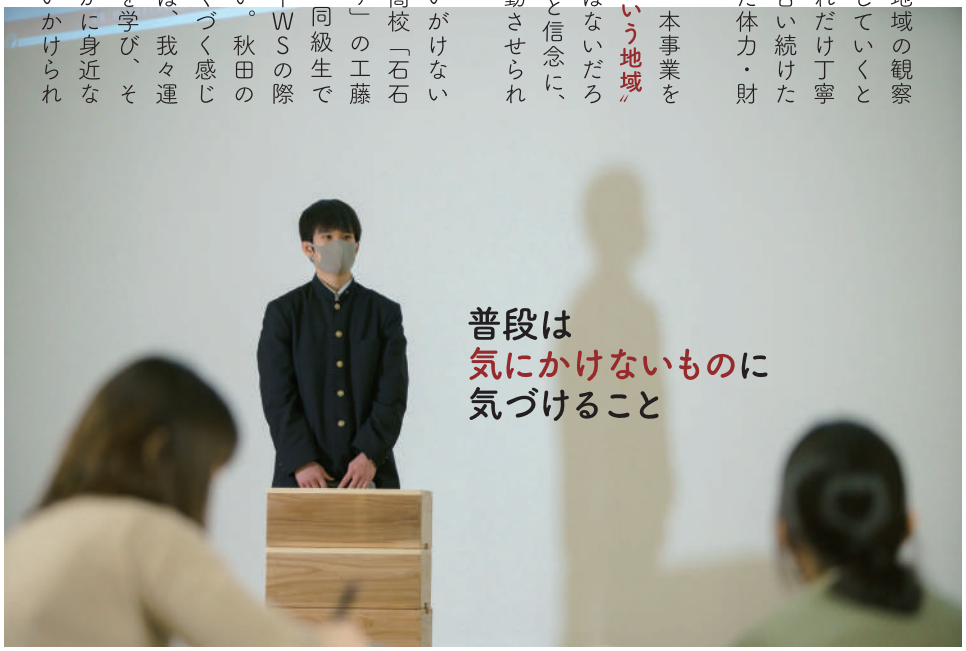
しかし、そんな岡部くんの大嶋くんを思う気持ちがあって走り出すことができた新屋卍會だったが、12月の中間報告会から8日後、岡部くんは突然この事業への参加を取り止めたいと、その意思を伝えるに至る。自分に納得のないまま、自分に嘘をついてまで本事業の活動を続けることなどせず、このタイミングで自分の気持ちに正直に「ここで辞める」というジャッジをした岡部くんの決断の意味を、我々運営チームはしっかりと噛み締める必要がそこにはあった。

そんなチームとして在り続けることの難しさを感じさせられるタフな過程を乗り越え、最終成果報告会では、大嶋くん一人で堂々とこの半年間を振り返ってくれた。「何気なく生まれる笑いは、普段気にかけないものに気づくことである」と話してくれた大嶋くん。普段歩き慣れた通学路を敢えて変えてみたことで、**「田んぼに群がる白鳥の群れ」**を見つけ、そこから渡り鳥の特徴を調べてみたこと。**「めぐり傘」という社会のデザイン（仕組み）**を、何気ない日常であったお母さんの車の中に見つけたこと。地域の観察から、自分の中の感情を実感していくという難しい内省の過程に、これだけ丁寧に、そして素直に一人で向き合い続けた大嶋くんがこの半年間で蓄えた体力・財産はとても大きなものだろう。

という意味でも新屋卍會は、本事業を通じて最も〝**自分自身（一人）という地域**〟と対話したチームだったのではないだろうか。そして、その彼の勇気と信念に、常々我々運営チームは甚く感動させられていた。

最後に、本事業における思いがけない再会を紹介したい。秋田中央高校「石石混輝 すぷらっしゅしーかーず」の工藤くんは、大嶋くんと小学校の同級生であったそうで、本事業の各集中WSの際には声を掛けあっていたらしい。秋田の狭さ、そして地域の広さをつくづく感じたエピソード。新屋卍會からは、我々運営チームこそ未熟であることを学び、そして観察の営みにおいて、いかに身近なものを見れていないのかを問いかけられた気がした。

（P40）



## 普段は
## 気にかけないものに
## 気づけること



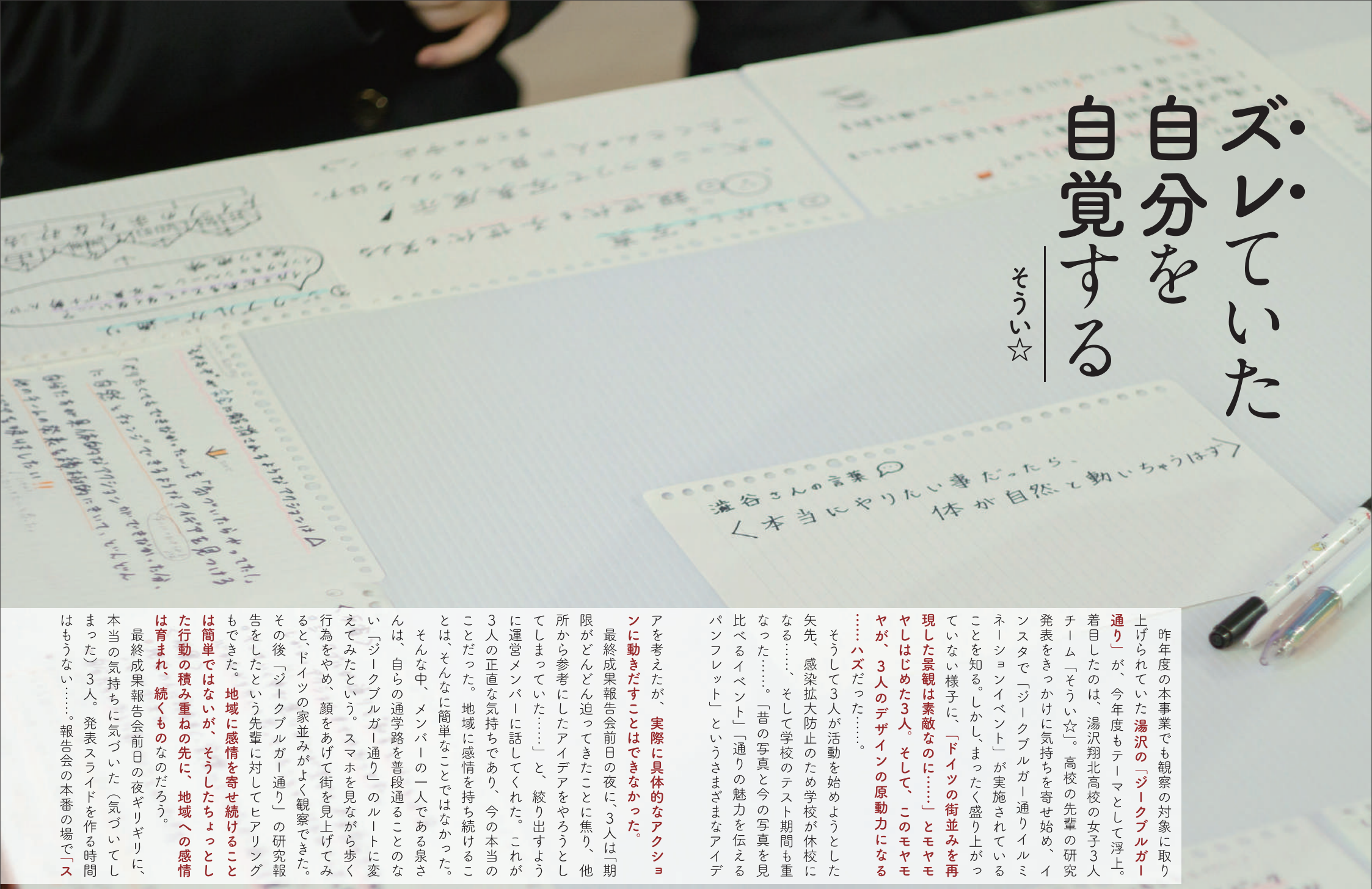


母の車の車内を観察することから知ることのできた「めぐり傘」。

※「めぐり傘」
（株）全国商店街支援センターが行う
忘れ物の傘をリユースする取り組み・仕組み

普段通らない田んぼの農道を観察することから
発見できて嬉しかったという「田んぼに群がる白鳥」

写真提供：新屋卍會



# ズレていた自分を自覚する

そうい☆

昨年度の本事業でも観察の対象に取り上げられていた**湯沢の「ジークブルガー通り」**が、今年度もテーマとして浮上。着目したのは、湯沢翔北高校の女子3人チーム「そうい☆」。高校の先輩の研究発表をきっかけに気持ちを寄せ始め、インスタで「ジークブルガー通りイルミネーションイベント」が実施されていることを知る。しかし、まったく盛り上がっていない様子に、**「ドイツの街並みを再現した景観は素敵なのに……」とモヤモヤしはじめた3人。そして、このモヤモヤが、3人のデザインの原動力になる……ハズ**だった……。

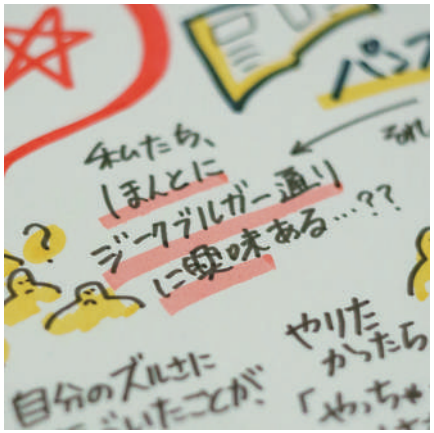
そうして3人が活動を始めようとした矢先、感染拡大防止のため学校が休校になる……、そして学校のテスト期間も重なった……。「昔の写真と今の写真を見比べるイベント」「通りの魅力を伝えるパンフレット」というさまざまなアイデアを考えたが、**実際に具体的なアクションに動きだすことはできなかった。**

最終成果報告会前日の夜に、3人は「期限がどんどん迫ってきたことに焦り、他所から参考にしたアイデアをやろうとしてしまっていた……」と、絞り出すように運営メンバーに話してくれた。これが3人の正直な気持ちであり、今の本当のことだった。地域に感情を持ち続けることは、そんなに簡単なことではなかった。

そんな中、メンバーの一人である泉さんは、自らの通学路を普段通ることのない「ジークブルガー通り」のルートに変えてみたという。スマホを見ながら歩く行為をやめ、顔をあげて街を見上げてみると、ドイツの家並みがよく観察できた。その後「ジークブルガー通り」の研究報告をしたという先輩に対してヒアリングもできた。**地域に感情を寄せ続けることは簡単ではないが、そうしたちょっとした行動の積み重ねの先に、地域への感情は育まれ、続くもの**なのだろう。

最終成果報告会前日の夜ギリギリに、本当の気持ちに気づいた（気づいてしまった）3人。発表スライドを作る時間はもうない……。報告会の本番の場で「ス




**ライドにはないですが……」**と勇気を持って切り出し、**「最終的に何か具体的なアクションができなかったのは、心から関心を持てていなかったから……」「自分達が本当に心からやりたいと思っていることからズレた行動を取ってしまっている、そのこと自体（自分）に気づけたことは、今回の自分達にとっての成果だった」**と正直に発表してくれた。そこには、事前に用意された、どこかから借りてきたような言葉は一切無かった。



## 「地域に興味がある」と“言葉”にするということの意味と責任

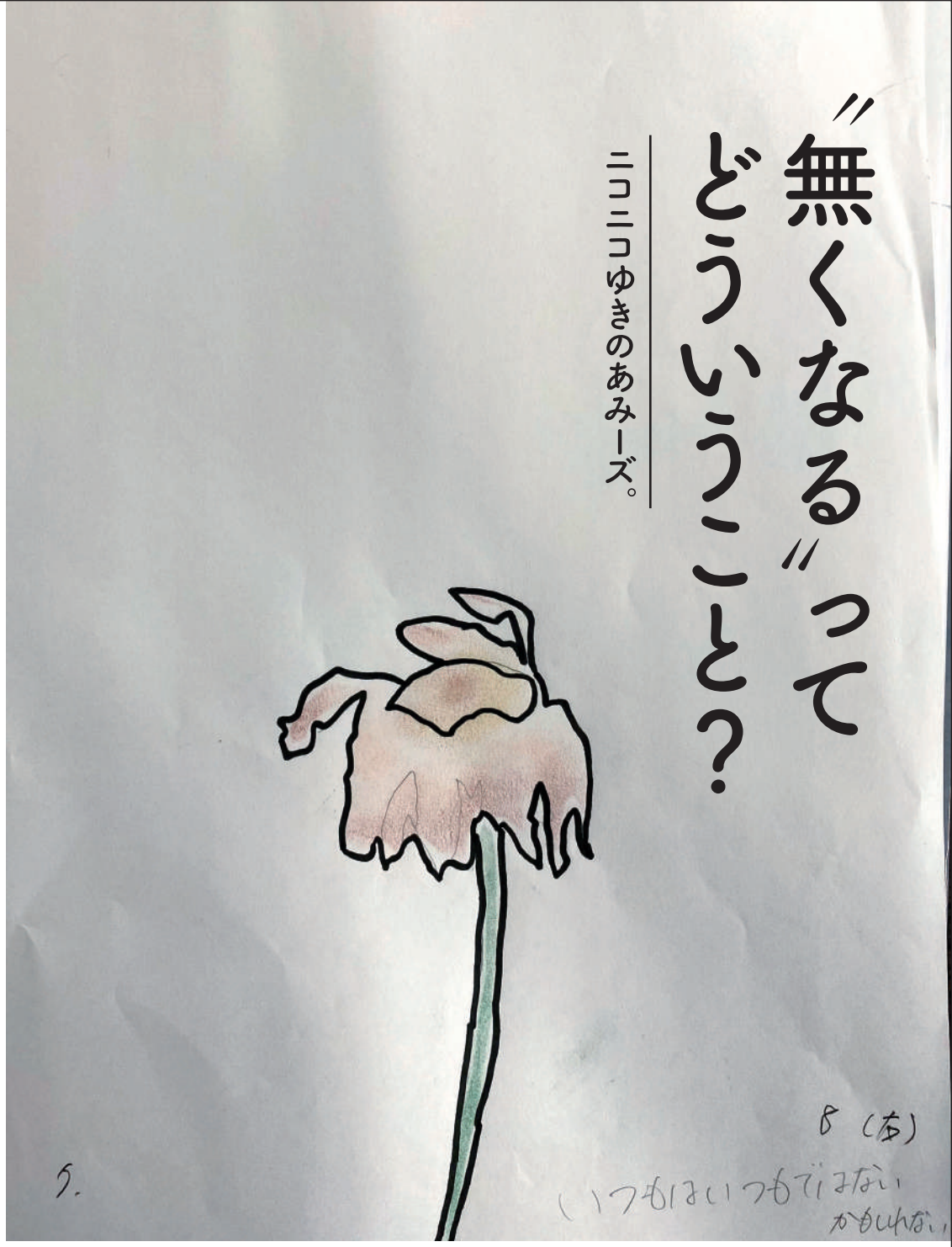
報告会前日の夜に、本事業の運営メンバーの一人からあった**「本当に自分がやりたいと思っていることだったら、体が自然に動いちゃってるはずだよ」**とのアドバイスを、コタツの天板真ん中に展示した3人。それは、今の自分たちに対して焼き付けておかなければいけないという意思であり、自分たちのこれからの行動一つ一つを大事にしたいという気持ちにも思える、彼女たちの血の通ったアクションだった。自分の気持ちに嘘をつかず、美談にもせず、背伸びもせず、地域と真正面からつながるということの難しさを、この半年間で痛いほど実感してくれたのは、このチーム「そうい☆」の3人だったのかもしれない。



資料提供：そうい☆

# “無くなる”ってどういうこと？

ニコニコゆきのあみーズ。



絵本のイラスト制作案・原画（複写）　提供：にこにこユキノアミーず。





学校で「いぶりがっこ」を作る授業の様子

写真提供：にこにこユキノアミーず。



「いぶりがっこ」

写真提供：にこにこユキノアミーず。



※大曲農業高校のチームは報告会当日、学校からのコロナ対策の関係で残念ながらオンラインでの参加・発表となった

## 実感の無い“使命感”への危機感

県内でも数少ない農業高校である大曲農業高校・野菜部の女子メンバー「にこにこユキノアミーず。」の3人は、本事業の初期の段階において、**秋田の名物である「いぶりがっこ」を守り、残さなければいけないという“使命感”**を抱く。そして、その使命感を「絵本」で表現したいとスタートするのだが……、実際そんな彼女たちの言葉には、彼女たち自身のお腹の底にある本心が感じられない、どこか浅はかなものがあった。

そんな3人に、**「みんなは、いぶりがっこが秋田から無くなったら『嫌だ』って、本当に心の底から思っていますか？　別にいぶりがっこが秋田から無くなっても、そんなに困らないんじゃないですか？」**と問いかける。すると、あっさり「別に無くなっても気にならないかも……」と、正直に自分たちの気持ちを曝（さら）け出しはじめる彼女たちがいた。農業高校に所属する彼女たちの日常の思考は、常に「農業・一次産業」から離れられないガチガチな思考で、専門的な学びの場（レール上）であるが故に、さまざまな角度から

物事を捉えたり、自分事として感じる力が希薄になっている状況が見られ、そこに危機感を覚える我々運営チームがいた。

そんな彼女たちに、「本当に地域から無くなったら嫌だって心から思うものって何？」と、さらに問いかけた先に出てきたものは、**何でも安く欲しいものが買える「ドンキホーテ」**だった。「きっとこの気持ちの方が、今のみんなの本当だよね」と実感し、確認し合い、その先に**「〝無くなる〟ってどういうことだろう？」**という、もう一歩進んだ気持ちの観察と問いを深めていく。すると、メンバーの一人・菅野さんが岩手県の陸前高田市に自分のルーツがあることをポツリポツリと語り始めてくれる。**「5歳まで住んでいた私の故郷である陸前高田は、東日本大震災で、一度〝無くなった〟と私の中では思っています」**と。そして「いぶりがっこが無くなったら嫌というよりも、**いぶりがっこを大事にしてきたその周辺の地域の関係性が無くなることの方が、私は嫌**かもしれない」と言葉にする彼女。



東日本大震災（2011年）
当時の陸前高田市の様子

写真提供：
にこにこユキノアミーず。



奇跡の一本松　写真提供：にこにこユキノアミーず。



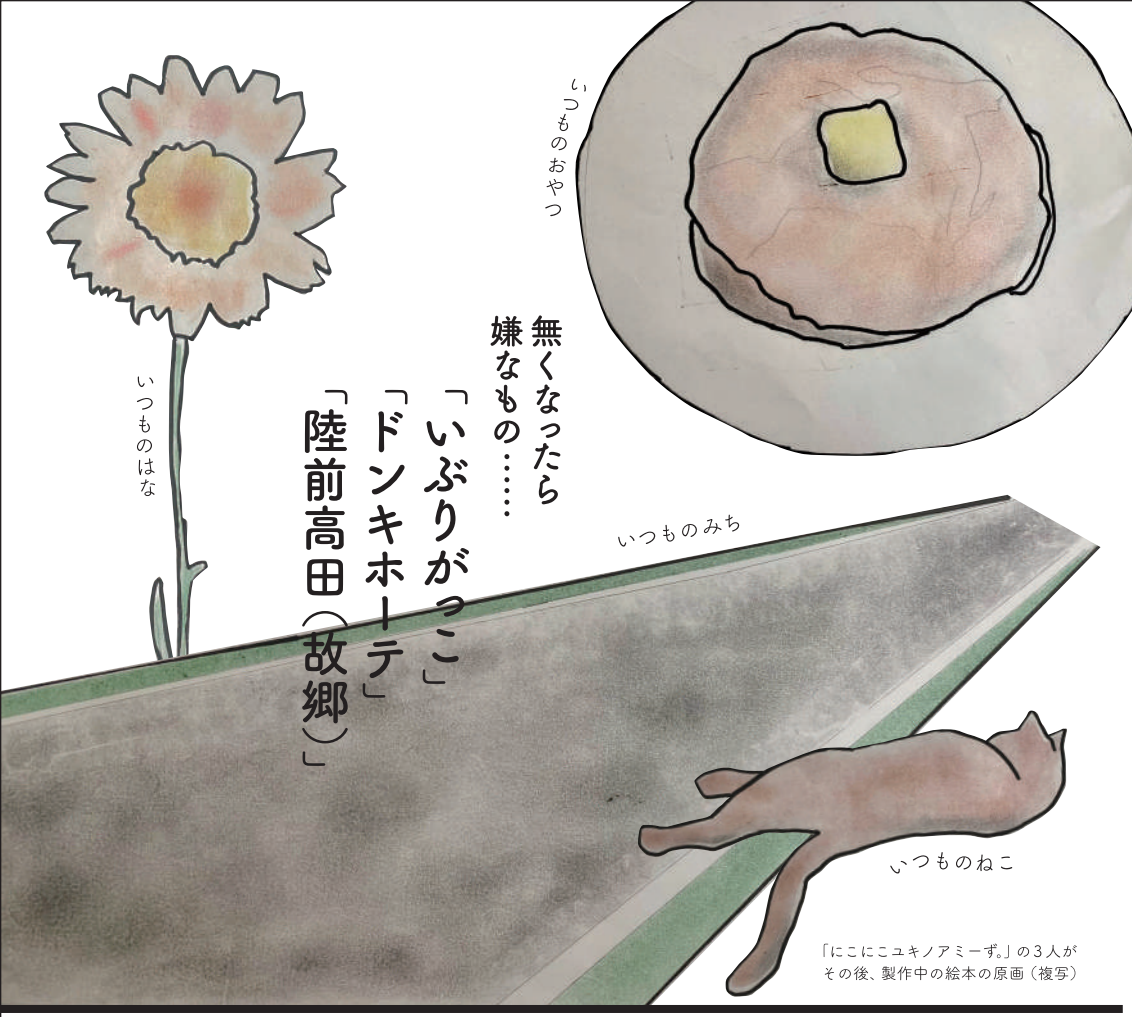


東日本大震災からの復興によって
様変わりした陸前高田市の風景・様子

写真提供：にこにこユキノアミーず。

**「ふるさと」を無くしたことなんてないから**
**「ふるさと」を無くした時の気持ちなんて**
**私には分からない**　※菅野ゆき乃さんの「ふるさと」の話を聞いた時の、高橋あみさんの素直な言葉






**無くなったら嫌なもの……**
**「いぶりがっこ」**
**「ドンキホーテ」**
**「陸前高田（故郷）」**

「にこにこユキノアミーず。」の3人が
その後、製作中の絵本の原画（複写）

そんな彼女のなかにあった本当の気持ちを知ることを通じて、〝無くなるということ〟がどういうことなのかを、しっかり密度を持って実感してゆく3人。**「いぶりがっこ」「ドンキホーテ」「ふるさと」**、そのどれもが〝無くなってほしくないもの〟として同じではあるけれど、そこに付随する**〝家族や知り合い、地域の人たちとの交流や関係性までもがなくなる〟**という意味では、その3つの要素の間に確かな違いがあるということを、3人はゆっくりと自分の中で感じ合っていく。

これまで感じることのなかった〝無くなる〟ことを3人それぞれの意見を混ぜ合うことで、実感し合うことのできた彼女たちが描く物語は、ここでやっと「絵本」というカタチになることを許されはじめてゆく。そうして、ここから完成しようとするこの一冊には**〝「ふるさと」という地域〟を思う心・物語**がしっかりと実感を持って描かれていると信じている。

絵本は完成次第
こちらのHP内で
ご紹介します

※昨年に続いて、今年も絵本の印刷・製本は、地元大仙市・大曲の印刷会社「(株) 仙北印刷所」さんのご協力・支援をいただきました

# 地域の〝想い〟を開ける

## んだなっ！



能代高校の3年生女子3人ではじまったこのチーム。美術系への進学を希望しているという共通点を持った3人だったが、受験などの兼ね合いなどもあり、途中で1人の仲間が抜けてしまい、最終的には2人で活動を続けることになった「んだなっ！」チーム。

2人の観察は常に身近な地域、生活に寄り添ったものだった。通学路の線路脇を毎日雪かきしてくれる農家さん。久しぶりに参加した地域の正月行事で見た、普段の暮らしでは見えなかったご近所さんたちの繋がり等。そんな2人が、最終成果報告会で伝えたいと思ったのは、ある看板屋さんのことだった。**「キャラクターの顔が〝福笑い〟のようになっている看板が面白い」**という笑いの観察から、高校近くにあった、ある看板屋さん**『桜庭看板店』**に辿り着く。外からは様子が見えづらいそのお店に入っていくと、昭和の雰囲気が漂う薪ストーブと、壁中に貼られた色とりどりの看板たち。それはこの看板屋さんが、ここ能代の地域で積み重ねてきた長い歴史の蓄積であり、私たちが何気なく見過ごしてしまうような価値のある地域らしさだった。そんな『桜庭看板店』さんの室内の写真を見せながら、看板店での話を意気揚々と嬉しそうにしてくれる2人に、我々運営チーム自身が「自分たちも行きたい！」と嫉妬してしまったのは言うまでもない。

本事業の運営サイドである我々が、このチームの伴走を担当していく上で、1つだけ意識していたことが、2人に**〝想い〟を知ってもらうこと**。これから美術



「んだなっ！」の2人が最初に気になった、福笑いの看板

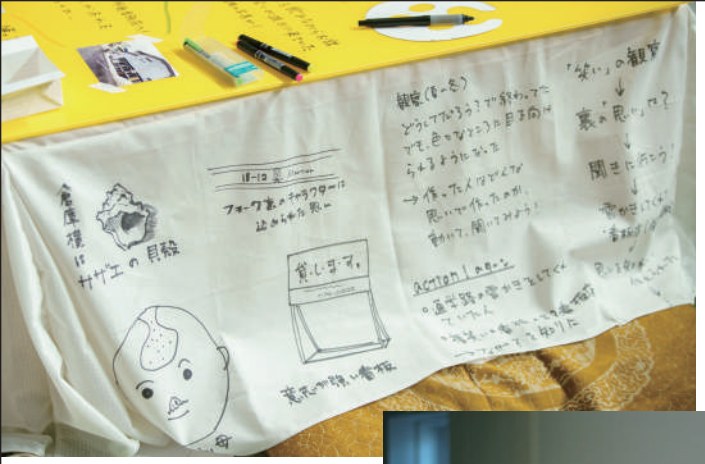


桜庭看板店の外観



桜庭看板店の桜庭さん

掲載写真（計4枚）提供：んだなっ！









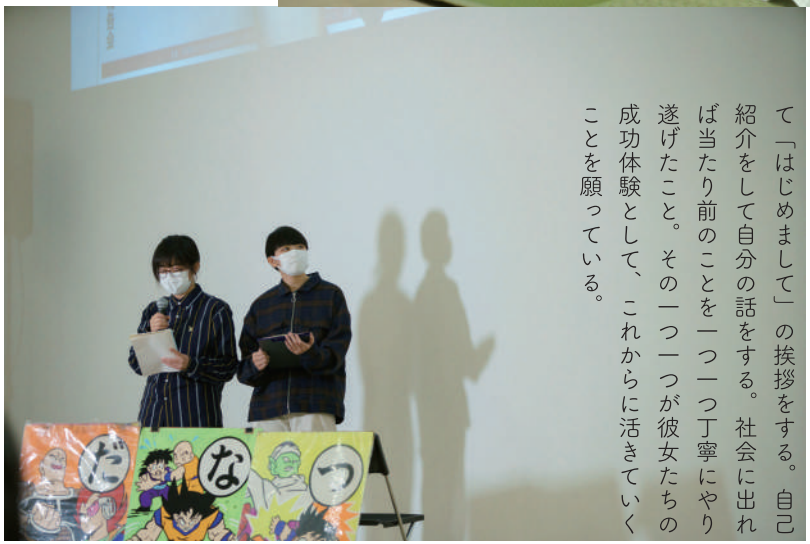
「んだなっ！」のもう一人のメンバーだった生徒が本事業の中間報告会で発表してくれた『隣の席のK君』の観察も素晴らしい視点だった

の世界に飛び込んでいく2人。何かをデザインする。何かを表現する。それは描くのか、奏でるのか、作るのか。どんなアウトプット方法でもいい。しかし、表現のなかには必ず、自分たちが納得できる〝**意図**〟や〝**想い**〟が含まれていなければならない。そのことを実感するために、〝**地域に存在する誰かの想い**〟を知ることで、彼女たちがこれから自分の表現に向き合う上での、想いの乗せ方を知る経験・一助になれたら……、という想いが我々運営チームサイドにはあった。

地域の観察から『桜庭看板店』という、何10年もこの地で続いてきた〝**想い**〟に、勇気を出して飛び込んでいった2人。毎週のMTGでもこちらが質問するまで話をしてくれなかったり、WSで対面しても目をあまり合わせてくれなかったシャイな2人が、気になった看板屋さんの扉を開け飛び込んで行き、最終的に計3回もお邪魔しコミュニケーションを深めていってくれた。そんな彼女達のアツい〝**想い**〟が伝わったのか、**当初『桜庭看板店』の桜庭さんは最終成果報告会の会場に見に行きたいとお話ししてくださっていた**（当日は都合がつかず、叶わなかったが）。

その代わりに、桜庭さんは過去に自らが作ったカルタ仕様の看板（ドラゴンボールの看板）を2人に渡してくれていた。

見ず知らずの人に会うために、アポを取ろうと電話をする。お店のドアを開けて「はじめまして」の挨拶をする。自己紹介をして自分の話をする。社会に出れば当たり前のことを一つ一つ丁寧にやり遂げたこと。その一つ一つが彼女たちの成功体験として、これからに活きていくことを願っている。



## 自分の興味に素直に、正直に。

今回の最終成果の発表の場・課題の一つでもあったコタツの天板とコタツの掛け布団すべてを抜群のセンスで、デザインしてくれた「んだなっ！」。



# 〝雪目線〟の一曲

## デジタルマルチーズ

僕は舞い落ちる雪 僕のせいで迷惑をかける

住む場所を壊したり 生産性を奪ってしまう

こんな僕でも悪いところばかりじゃないよ

あなたを笑顔にすることだってできるさ

君を支えることができるそんな魔法

春になると雪解け水で君に栄養を与える

僕を引っ越しさせると

あなたはきっと笑顔になるだろう

1人だと綺麗なのにみんな集まると邪魔物扱い

いつもあなたの頑張ってる姿を近くで見てるよ

君たちを美味しくしてさ食卓に笑顔を咲かせる

あなたたちにも笑顔をなってほしいのさ

これが本当の「ゆきのきもち」





昨年の本事業でも参加のあった大曲農業高校・野菜部のチームにも感じた危うさ。それは、**一つの視点（農業・一次産業）からはみ出していけない、そのガチガチに固められた思考・体質に対する違和感・危機感**だった。大曲農業高校からの今年の参加チームである「デジタルマルチーズ」の男子４人も、まさにその「はみ出せない、壊れきれない」という点で、素直過ぎる、秋田らしい典型的なチームだった。

そんな彼らに投げかけた**「壊れてみてください」の一言**。つまり、一度「農業・一次産業」というところから離れてみてくださいというアドバイスに混乱してしまう４人組。本事業開始当初から彼らが主張していた**「『わかじぇファーマーズ』という地元の若手農家集団を応援する歌を歌いたい」**という思考からどうしても離れられない４人組。応援する歌を作るにも、その手前には実感のある「観察」と「感情（疑問意識など）」そして「メッセージ」がないことには歌など作れるはずもないし、無責任に作ってはいけないものだろう。**歌は作らせない、歌は歌わせない、歌うための機材も購入させない、歌を練習するためのスタジオも借りさせない……、とにかく、アクションする手前にあるべき彼らの〝本当の気持ち〟を育むことが必要**であり、そこがきちんと育まれないことには小手先の〝それっぽ







『わかじぇファーマーズ』のみなさん

写真提供：デジタルマルチーズ

いアクション〟を許すことはできなかった。**きっとこのチームは全14チームある中で一番ブレーキをかけられ、悶々（もんもん）と半年間を過ごしたチーム**に違いない。

そんな彼らは、一度「農業」から離れ、ふと気になった「アップル社のロゴマーク」への興味・疑問に向き合い、必死に苦しみ、〝観察するということ〟を自分たちなりに理解していく。そうして観察を重ね、自分たちの本当の気持ちや感情を実感し辿り着いた観察の対象が、まさに、**秋田という地域を象徴する存在とも言える「雪」にまつわること**だった。

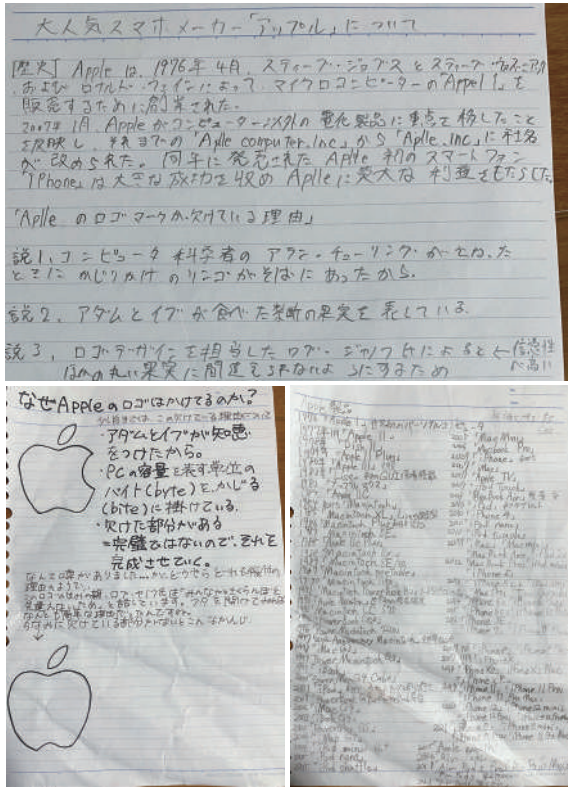
「雪」という存在に対する「わかじぇファーマーズ」の方々の気持ちや考えをしっかりと調査・観察し、その先にやっと描き出すことができた**〝雪目線での一曲〟**。一人のメンバー以外、ろくに楽器を弾けるメンバーのいない「デジタルマルチーズ」だけど、そんな彼らだからこそ奏でることのできる本当の素直な歌が、やっとここに輪郭を現す。この一曲が「わかじぇファーマーズ」という地域の方々の心に、しっかりとした強度を持って届いていくことを祈っている。

※大曲農業高校のチームは報告会当日、本来であれば会場で今回作詞・作曲した曲をライブで披露する予定だったが、学校からのコロナ対策の関係でオンラインでの発表となった






## 〝観察するということ〟を経験する




「アップル社」のロゴマークはなぜ欠けているのか？ という疑問から
じっくり観察すること、そして、そこから感情を作り出すことを経験・実感していく

写真提供：デジタルマルチーズ



写真提供：デジタルマルチーズ

やっと完成した曲
是非こちらから
聞いてください！

『ゆきのきもち。』
作詞・作曲
デジタルマルチーズ

# 秋田が〝好き〟と〝嫌い〟

## 君はアウトドア派？

新屋高校の2年生、女子2人によって結成されたチーム「君はアウトドア派？」。メンバーは「秋田には好きな化粧品のお店が少ないから、キラキラしたイメージのある仙台に進学したい」という、秋田が嫌いな堀井さん。そして「姉妹との時間が楽しいし、自分は静かなところにいたいから、ずっと秋田にいたい」という、秋田が好きな豊澤さんの二人だ。

そんな彼女たちの半年間は**「秋田が好き？嫌い？」**という一つのテーマにじっくりと向き合い続けた時間だった。少しずつ対話を深めていくなかで、2人それぞれにとっての**「秋田とはなにか？」「秋田が好き・嫌いとはどういう感情か？」**を、丁寧に検討し続けた半年間。

1月のメンタリングで堀井さんから、ある「いぶりがっこ」関連の商品の製造元や販売元を観察していたら、それが全て県外で製造・販売されていることに疑問を感じたという報告を受ける。彼女がこの疑問・違和感に気づくということは、〝秋田が嫌い〟という感情とそのままイコールだと認識して（決めつけて）良いのだろうか？　いや、そうではなく**〝秋田を気にかけている〟という気持ちの持ち様や態度**がそこにはあるという認識の方が正しいのではないだろうか……。

そんな堀井さんとのやりとりの過程において、「憧れのキラキラした仙台に行くということは、大好きなおじいちゃんとおばあちゃんに毎日会えなくなるということでもあるんだよ」という運営サイ




## 秋田を気にかける〝態度〟や〝姿勢〟









ドからのメッセージに、ハッとしてしまったという堀井さん。「キラキラしたところに行きたい」「大好きなお化粧品のお店がたくさんある街に行きたい」、もちろんそんなふうに自分に正直に思うことは大切なことでありながら、そこには失う時間や関係性があるということを想像できていなかった自分に気がついた堀井さんの中に、我々はなんらかの変化を感じた。そこには、それまで秋田に背を向けるようにただただ発していた〝秋田が嫌い〟とはほんの少し違ったニュアンスの感情が混じり始めていた。

そしてその一方、もう一人の豊澤さんからは、「秋田が見捨てられない」「お祭は減ってしまったけれど、ほかにも魅力がたくさんある」という言葉があった。〝好き〟だとは言っても、何も秋田に対して不満や言いたいことが無いわけではないのではないか。やはり豊澤さんが思う〝秋田が好き〟というシンプルな感情のなかにも、**〝秋田を気にかけている〟**という、堀井さんと同じ**気持ちの持ち様や態度**があるように思えるのだ。

そんな深い気持ちを、丁寧に2人と共有しあい、素直な言葉で紡ぎ続けた半年間。**「好きか、嫌いか」という二項対立**から始まったからこそ、**この〝好き〟と〝嫌い〟の間に浮遊するグレーななんらかの共通項を導き出そうとする時間**を大切にできた2人。

そんな「君はアウトドア派？」の2人は、最終成果報告会を午後に控えた午前中の時間から「あなたは秋田が好きか？嫌いか？」のアンケートを収集する作業を報告会の現場で精力的に行っていた。そして、そのアンケート結果を、そのままこたつの天板として使用し、最後の発表に臨む。そして、まるで**秋田への手紙を読んでくれるかのように**、これまでの率直な気持ち、気持ちの揺らぎを2人それぞれに、言葉にしてくれた。

4月からは3年生ということで、最近は進路学習も増えてきているという2人。秋田への思いは、人生の様々なタイミングで「好きなのか？　嫌いなのか？」の双方に揺らぎ続けるだろう。その「揺らぎ」をも大切に味わいながら、2人それぞれが、それぞれに活躍できる場・未来を決断していけることを願っている。

## 秋田が好きな人と、嫌いな人がいるのは、なぜだろう？

# “チーム”こそ“地域”

## 石石混輝（せきせきこんごう） すぷらっしゅしーかーず




本事業では2～3人までの人数で構成されたチームが応募の対象であるというなかで、事前説明会の後、事務局に一通のメッセージが……。**「運営されている皆様に相談です。私たちのチームは4人です。4人じゃなきゃ駄目なんです！」**と秋田中央高校の同じ部活からなる4人を代表してリーダーの渋谷くんが熱いメッセージをくれたのだ。そんなリーダーの熱意に負け、本事業の事務局（秋田県）もその応募を許可することに。秋田県の事業として、こんなやりとりが成立してしまえることに、本事業が本来大切にすべき本質を見せられた気がした。

そんなこんなで、応募資格の壁を自らの熱意で乗り越え、本事業に乗り込んできた「石石混輝 すぷらっしゅしーかーず」は、本事業への参加者全員がそれぞれの観察記録を投稿・共有するオンラインの場（slack）で、互いに切磋琢磨するかのように観察の投稿数を積み重ねて

# 〝無駄〟と〝脱線〟の価値

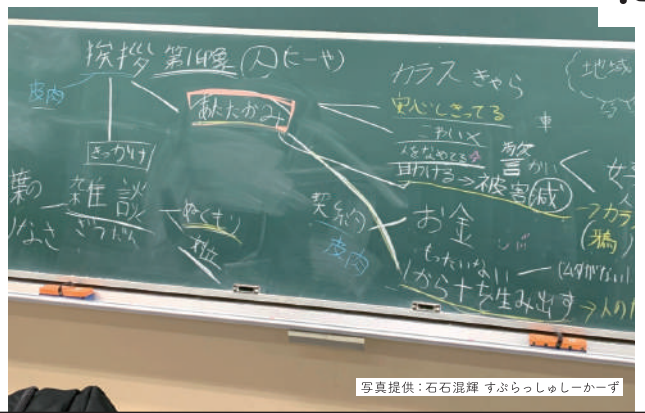


半年間の観察の数々 | 写真提供：石石混輝 すぷらっしゅしーかーず









写真提供：石石混輝 すぷらっしゅしーかーず






いく。全チーム中、観察の投稿数1位と2位はこのチームの2人。論議が脱線することも、無駄話も、ボツと言われるようなアイデアも、それはそれはダントツに他チームより多い4人だったが、その**〝無駄〟だったり〝脱線〟だったりすることの揺らぎこそが、デザインの最終着地点を見出すためには必要な過程**なのだということを、改めて素直に教えてくれたチームだった。オンラインでのワークショップの発表の際も、4人それぞれが資料を準備し、かつ観察の深さも多様さも群を抜き、他チームの多くが彼らから大きな刺激と影響を受けていたのは間違いない。もっと自由に、もっと楽しく取り組もうと、本事業全体の気運を引き上げていく力を持っていたチームが「石石混輝 すぷらっしゅしーかーず」だった。

〝地域〟とは一体なにか？ を考える観察では、〝挨拶のやりとり〟という切り口から地域を定義していく4人。地元の町では、誰もが知り合いなので挨拶をする。しかし、一歩地元の町を出て、高校生として秋田市に出てくると通りすがりの人との間に挨拶は存在しない。学校では挨拶運動があるのに、学校を出ると誰も挨拶をしない。そんな観察から、**〝挨拶を交わし合える範囲こそが地域〟なのかもしれないと捉え、定義**することのできるこのチームの言葉一つ一つに日々驚かされる我々運営チームだった。

そうして最後の最終成果報告会に向けた本番ギリギリの3月。これまでの膨大な観察を踏まえてアイデアを出したり、課題を解決するためのプロダクトを試作するなど、彼らには圧倒的な行動力はあるものの、4人が一緒に混ざり合ったからこそ生まれる、彼らのオリジナルの領域まではなかなか辿りつけない苦しい時間が続いていく。最終成果報告会1週間前に話し合う時間を設け、4人がお互いに目線を向け、それぞれの思いや強み、個性について理解を深めていく。チームで半年間取り組んできた、自分たちの**過去の観察を観察する（振り返る）という内省行為**に、自分たちのチームらしさを見出していく。4人だからこその一言のメッセージに向かっていくその姿はとても地味ながらも、地域につながろうとする姿勢の一番ピュアなところを見せてくれているように感じた。

結果、最終成果報告会では形として目に見える成果は残せなかったものの、豊富な観察量を誇る4人だからこそ辿りついた学びは、**「一番身近でつながるべきは〝チーム〟であり、〝チームこそ地域〟だ」**という、とても地味で、静かで、素直な本当のことだった。そして、そこには**〝温かみ・温もり〟**という、彼らなりの半年間の答えとなる一言が添えられていた。

# “先生”だって“地域”だ

## 凸凹（でこぼこ）コンビ＆AAコンビ




平成高校の仲良し4人組。「1チーム3人まで」という応募資格の制限から、**「凸凹コンビ」と「AAコンビ」の2チームに別れて参加**することに。「自分たちの〝笑い〟は一体どこから来るのか？」という疑問からはじまり、学校生活や雑談の中から自分たちなりの〝笑い〟を見出していた彼女たちだったが、両チームとも「些細な会話から湧き出る笑いの観察ばかりで、他のチームとズレているのではないか……」と不安を感じていく。

そんな中、本事業の運営メンバーが学校訪問する1回目の話し合いの際に、「そもそも観察に正解は無いもので、自分たちの観察は間違いではなく、そのまま追求して良いものだ」と気がついた4人。

4人（2チーム）はそのまま日常の些細な笑いを追いかけ、日々笑いのメモ活動を続けたりする中で、**彼女たちの観察に見られる〝笑い〟の傾向には「先生関連の出来事が多い」ことを発見**し、着目していくこととなる。そうして、最終的にはやはり仲良し4人組として最後のアクションに向かうことが自然に思えるようになり、**『凸凹コンビ＆AAコンビ』**一緒に力を合わせて走り切ることに。もうこの時点で、「1チーム3人まで」という秋田県が（大人の都合で）当初設定した応募資格の制限など、一切意味のないものになっていたのは言うまでもない。

「卒業すると、先生と会う機会が無くなる」「先生に会わないうちに記憶が徐々に薄れていって、忘れてしまうのが悲しい……」そんな気づきから、**「先生図鑑」というキーワードをデザイン**し、先生を観察した図鑑を作ろうと思い至る「ＡＡコンビ」の2人。学内では校則で携帯を使うことができないという理由もあって、携帯電話は使わずメモ活動を続けていた2人だったが、最終的には学校での規則に囚われることなく、自ら先生に携帯電話の使用許可を取り付け、僅か2日間で写真を撮り終えて**「先生図鑑」**の制作に取り組んだ。まさに**「学校内で携帯電話を使ってはいけません！」という校則に対して理解を得ようとする、彼女たちなりの意思ある〝学校のデザイン〟とも言えるアクション**がそこにはあった。

一方で「凸凹コンビ」の2人が最終的にカタチにしたものは、**４コマ漫画『国語・算数・理科・デザイン！』**だった。「リンゴ●」を「リンガ●」と発音していた先生の発音の悪さが原因で、テストで間違ってしまったという皮肉な結末・笑い話や、妹が理科の宿題に「ホタ●ルイカ」と書きたいところを「ホテ●ルイカ」と書いてしまっていたことに対する笑い話など、彼女ら2人の日常の些細な〝笑い〟を中心に、ユーモアたっぷりに描かれた**４コマ漫画**には、「先生図鑑」に登録されている先生たちも登場していることで、スピンオフ作品のように「４コマ漫画」を図鑑と合わせて読み楽しむこともできる。

この2チームを総合して感じられたことは、**『〝先生〟という存在もひとつの〝地域〟であり、〝先生を知り、先生と正直に向き合う〟ということは〝地域と向き合う〟ことにも繋がる』**という学びだった。小学校、中学校を経て〝**先生**〟という存在がより近く感じられるようになっていく高校生ならではの観察。何度も立ち止まった彼女たちの観察は、最終的に沢山の仲間の共感を呼び、その明確な成果物として**「先生図鑑」「４コマ漫画」**を最終成果報告会の場で披露・共有することができた。高校3年生の半年間、つまずきながらも4人で協力して一つのことをやり遂げた記憶と、「図鑑や４コマ漫画に残されること」を快く受け入れてくれた素敵な先生たち（学校）との思い出は、彼女たちの心の中にアルバムのように、ずっと残り続けていくことだろう。




## “先生という地域”を観察することで実感できる“地域”がある









# “ありがとう”のために

## ぱんだすたーず

一人で事前説明会に参加し、参加者の中にチームメンバーを探し求めていた秋田公立美術大学3年の斉藤さんと、社会人の高橋さんそれぞれが、その場で初めて声を掛け合い結成されることになった異色のチーム「ぱんだすたーず」。最終的には、高橋さんが高校時代からの友人だということで連れてきた大友さんも加わり、意気投合し3人のチームに。今年度では唯一、チームメンバーが全員大学生以上の「ぱんだすたーず」の観察は、彼らならではの幅広さと着眼点で、本事業の開始当初はグングン突き進んでいく印象だった……。



最終報告会の最後のあの場に3人が揃うことは残念ながら叶わなかったが、**「人と共に、チームとして何かを成し遂げることの難しさを感じ切ってくれた」「地域とつながるということの一番底の辛い部分を体現してくれた」**のが、ぱんだすたーずであり、斉藤弥琴さんだったのだと思う。あの場に立ってくれた斉藤さんと、会場にいた参加チームのみんな、そして我々運営チームのみんなが、それぞれに**「ありがとう（感謝）」を感じ合えたあの時間・あの空間こそ、「地域」と繋がるということの基本の姿勢**だったのだと振り返る。今回「国語・算数・理科・デザイン！」に携わった全員の心の中に、確実に嘘のない爪痕を残してくれたチームであり、いつまでもそこに学び続けたいと思える、そんな瞬間だった。

近年、コロナ禍において公共・商業施設の入口に設置されるようになった「アルコール消毒スプレー」の設置形態のバリエーションを観察した記録。コンビニアルバイト的視点から見る、お客さんの「レシートの受け取り方」の観察。出会ったばかりの3人で、秋田市内を散歩して発見した観察の数々……。このように、様々な日常のディテールに目が行き届く〝視野の広さ〟や〝意識の散漫さ〟が裏目に出てしまったのか……、**このチームの悩みはいつだって〝話し合いが脱線してしまう〟**ことだった。そんな中で、観察で取り上げるポイントはどこにするのか？　自分たちが興味を持って観察している共通点は何なのか？　最終成果報告会での発表の仕方はどうするのか？等、最後の最後まで悩まされることになる「ぱんだすたーず」。

そうして、本番の1週間前の土曜日、急遽対面でのミーティングを設けることに……。しかし話し合い当日、現地に来てくれた斉藤さんと高橋さんから、まずは大友さんのチームからの脱退を告げられる。そして**「3人揃っての『ぱんだすたーず』なのだから、大友さんが抜けてしまった状態で、このままチーム名を継続しての参加はできない」**とハッキリ言葉にする斉藤さんと高橋さんがそこにはいた。大友さん不在の状態で重ねた話し合いの中でも、最終成果報告会に参加するのか不参加なのか……、2人の気持ちは最後ギリギリまで揺れ動くのだった。

そして、報告会の前日。当日に向けて準備が進む文化創造館の場に、斉藤さんが一人現れた。勇気を振り絞って**「『ぱんだすたーず』ではなく、「国語・算数・理科・デザイン！」のいち参加者『斉藤弥琴』として、一人で報告会の場に立ちたいです」**と伝えに来てくれた斉藤さん。そして本番当日も一人であの場に立ってくれた斉藤さん。そんな彼女からは**「今日は自分の口で、直接皆さんに『ありがとう』を伝える最後のチャンスだと思ってここに来ました」**というこの半年間への感謝の言葉があった。そして、今回の「国語・算数・理科・デザイン！」での活動を通して、**〝知らない人に話しかけるという勇気をもらった〟**と言葉を残してくれる斉藤さんがいた。それは、何よりもの、地域と繋がる第一歩だろう。

# 〝寄り添う〟デザイン

## Already Sisters



昨年、高校生の黒田さんと社会人の太田さんの2人で参加してくれた「Suddenly Sisters」。事前説明会の場で初めて出会った2人が、由利本荘市の商店街で100年以上続くお店にインタビューを重ね、体験記を制作したのが昨年の最終成果だった。お店へのインタビューを通して、これからもお店が続いてほしいと思い、応援するための宣伝チラシを作成しようとするも、お店からは「幕を下ろすので結構です」「余計な支援はしてほしくない」と断られた先に、悩み続けてから早1年。そんな楽しいだけではなかった、むしろ**大変だった昨年の取り組みを踏まえて、今年も敢えて「国語・算数・理科・デザイン!」に2年連続でチャレンジしたい! と応募してくれたのがこのチーム「Already Sisters」**。1年経って、2人はすっかり本当の姉妹のようになっていた。

## 2年連続で
## 同じ気持ちを持ち続ける
## ということの価値




一年前、2020年度「国語・算数・理科・デザイン!」最終成果展示会での2人の展示ブースの様子

2020 Suddenly Sisters → 2021 Already Sisters → 2022 !?

そうして2年目も、改めてさまざまな角度から観察を続ける2人。学校の校則へ違和感をもったことから、先生や生徒会にヒアリングをするなど、精力的に行動を起こしていく2人。しかしその一方で、**昨年の活動の中でご縁ができていた『小園旅館』にも継続して訪問**し、コロナ禍でのお店の実情をうかがったり、食事をご馳走になるなど、旅館の主人との関係をより深いものに育んでいく。昨年とは違う新しいことに取り組もうとはするものの、**やはり心はずっと「小園旅館」にあり、「小園旅館」という存在は、2人にとってついつい気にかけてしまうような存在となり、去年の恩返しをしたいと思うような関係にまで成熟**しはじめていた。そうして宿泊自体ができないこの状況下でも、なんらかの形で寄り添う方法を模索し続けていく2人がいた。

そうして、本事業の場で2年続けて観察で鍛えた思考・意識は、普段の職場でも力を発揮しはじめている。社会人である太田さんが職場環境で違和感があったことに対し、同僚にヒアリングをしつつ要望を明らかにし、上司に改善を働きかけることで職場環境の向上に繋がったというのだ。観察を通して、同僚や職場にある顕在化していない課題に気づき、自ら行動を起こすことが、2年間を通して得られた力・デザインであり、彼女の中で大きな自信にもなっていた。

最終成果報告会では、改めて「小園旅館」を訪問し、ご主人と交流を深めてきた話を発表。**「もうあなたたちは、私の孫みたいな存在だ」**と、ご主人の言葉でいただいたとのことに、彼女たちなりの**〝寄り添うデザイン〟**の意味がしっかりと相手に伝わりはじめていることを感じた。単年の事業であるのに関わらず、2年連続で本事業に参加し、新しいことに安易に手を出してしまうのではなく、**敢えて2年間同じところに寄り添い続けようとするその姿勢**は、本事業（秋田県主催の事業）への問いかけでもあり、そしてデザインのあるべき**〝寄り添う姿勢〟**を体現する、図太くたくましい達成感がそこにはあった。

最終成果報告会が終わり、コタツに寛ぐ各チームのメンバー一人一人に、さりげなく秋田の名物菓子である「金萬」を配り歩くその何気ない心遣いに、ますますこれからの2人の〝寄り添う姿勢としてのデザイン〟が楽しみでならなくなった。参加者みんながあの文化創造館の真ん中で頬張った「金萬」の味は、きっとこの先忘れられないことだろう。

**もう、あなたたちは、私の孫みたいな存在だ。**



小園旅館の店主との記念写真




写真提供：Already Sisters

# 誰のためのデザイン?!

やきいも



能代高校2年生の2人が、能代市の地域おこし協力隊である佐藤さんを今回の事業に誘って結成されたチーム「やきいも」。彼女たちは半年間のプログラムの中で、その半分以上の期間を**「野菜を販売している自動販売機」**に費やし、しつこく向き合い続けた。

観察トレーニングの最中、通学路にあった野菜を販売するための「自動販売機」に興味を持った3人。町の中心部から外れた、一見注視しなければ見落としてしまいそうな自動販売機を目に、**「この自動販売機のお客さんは誰なのか?」**という純粋な問いが彼女たちのなかに生まれていた。そこから、野菜をここで販売している人や、野菜をここで購入しているお客さんの様子を観察すべく現場に幾度か足を運ぶが、なかなかその姿は拝めず、冬に入るとついには自動販売機がブルーシートで覆われてしまい全貌が見えなくなってしまうという顛末に……。

その後、この自動販売機をはじめた人を見つけ出そうと近隣の家々を必死に探した末に、やっとの思いで管理している




謎の野菜自動販売機を発見

写真提供：やきいも



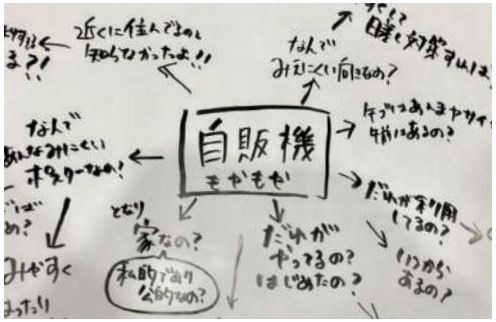

写真提供：やきいも



野菜の自動販売機を設置した佐藤さんご夫妻と　写真提供：やきいも



冬場はブルーシートに覆われてしまっていた
自動販売機を目の前に愕然……
写真提供：やきいも




資料提供：やきいも

## 自分のためのデザイン
## 地域のためのデザイン



最終成果報告会では、これまでの観察の過程を「スゴロク」のデザインで伝えてくれた

人に出会えるに至ったのだが、**「今よりもお客さんが沢山来ると困るから、これ以上この自動販売機の存在を広めるようなことはしたくない……」**と言われ、自分たちが話を聞きたいと思ってしまっていたこと自体が、エゴだったのでは？と不安に感じはじめる3人。それでもなんとか、自動販売機をはじめたご夫婦からお話をうかがう時間をいただき、実際自動販売機で野菜を販売してきたこれまでの経緯を聞くことに成功。自分の趣味のためにはじめたことが、気づけば地域に暮らす人たちのため（必要）になっていたというご夫婦の話に、**「自分のためのデザイン」が、気付けばいつの間にか「地域のためのデザイン」になっていた**という、そんなデザインこそが地域にとってはとても理想的で、無理のない健全な関係性を地域に生み出していくのだろうと気付かされる3人。

そうして、やっと出会えた自動販売機の方からのお話を聞けた後のミーティングにて。実際に話を聞いてみて、何か一緒にやりたいと思ったことはあったかどうか彼女たちに尋ねてみると、**「私たちができることはない。この野菜の自動販売機は、もうこの地域において完結しているデザインだと思ったから、ここはこのままでいい」**との答えが。そんな3人からの真っ直ぐな答えに、思わず運営サイドの我々は唸（うな）ってしまった。




写真提供：やきいも

本事業の半年間の成果として、〝何かをしなければいけない〟という期待は、こちらの一方的な都合だったのではないか？「その価値を広めるためにパンフレットやポスターを作って発信したい！」というような、よくあるどこかフォーマット化されたようなアプローチに意識が向かってしまっていたら、我々はなんと返答し、言い正そうか……？なんて正直なところそんなふうに思いながらミーティングに臨んでいたのだが、そんなことは我々の杞憂（きゆう）でしかなく、彼女達は一歩も、二歩も、その先を行っていた。

純粋に話を聴き、**「誰のためのデザイン？」**なのかという自分たちから湧き出てきた問いへの1つの答えを見出し、**「これ以上は、私たちにできることはない」**とそう言い切った3人。「春になったら自動販売機の管理者さんの畑に遊びに行って、野菜の収穫を手伝ったり、自動販売機に置く様子も見にいこうと思っているので、今から春が来るのを楽しみにしています」と、目を輝かせながら語る3人。彼女達が暮らす能代という地域の今後が、我々も楽しみでならない。




オンライン集中WS｜2021.10.27




「国語・算数・理科・デザイン！」事前説明会｜2021.7.11



中間報告会｜2021.12.11



第１回集中WS｜2021.8.3



2022.3.5｜秋田市文化創造館

令和３年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

# 国語・算数・理科・デザイン！
# 最終成果BOOK

《編集》
一般社団法人ドチャベンジャーズ

《編集・アートディレクション・デザイン》
澁谷 和之（澁谷デザイン事務所）

《写真》
鄭 伽倆（小宇宙感光）

《参加チーム（全 14 チーム）》

- Rainbow
- YOSH//
- 新屋卍會
- そうい☆
- にこにこユキノアミーず。
- んだなっ！
- デジタルマルチーズ
- 君はアウトドア派？
- 石石混輝 すぷらっしゅしーかーず
- 凸凹コンビ & AAコンビ
- ぱんだすたーず
- Already Sisters
- やきいも

半年間にわたる
全チームの「観察トレーニング」
アーカイブはコチラから

《運営・編集協力》
チームYOD（よりお尻を出す）
熊谷 涼（国際教養大学）
伊藤 未菜（秋田公立美術大学）
松嶋 駿（スタジオSSB）
平元 美沙緒（秋田ファシリテーション事務所）
澁谷 和之（澁谷デザイン事務所）
柳澤 龍（一般社団法人ドチャベンジャーズ）

最終成果報告会の
様子はコチラから

最終成果報告会
運営チームの
振り返りトークの
様子はコチラから

主催：秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画・トータルディレクション：澁谷デザイン事務所

2022年３月発行

## 日々の〝態度〟としての〝デザイン〟

今年も半年間の「観察・デザイン」の旅が終わった今、ここで僕からは一言だけ。「〝デザイン〟という思考は、デザイナーと呼ばれる一部のヒトだけが携えていれば良い思考・技術ではない」ということを、改めて強く再確認し、実感した半年間だった。

今回本事業に参加してくれた全14チームにとってのこの半年間という時間は、〝終わりなき、答えのない動詞〟に向き合うような、それはそれは苦しく不安な場であったことだろうと思う。本事業を進める過程のなかで何度も僕は「寄り添い続けること、向き合い続けることこそが、きっと〝デザイン〟であり、そのチカラをこの場で養い、みんなの将来の糧・体力にしてほしい」と、参加メンバーのみんなに伝え続けてきた。

〝地域につながる〟ということ、それは、きっと日常に出会うさまざまな人や場所、モノや状況に対して、きちんと自分の感情を大切にしながら、寄り添い向き合い続ける責任だと僕は思う。そんな日々の何気ない〝態度〟や〝姿勢〟としての〝デザイン〟が、ここ秋田に静かにも根付いてくれることを心から願っている。

澁谷デザイン事務所
**澁谷和之**

## 〝チーム〟という小さな〝地域〟

昨年からはじまった「国語・算数・理科・デザイン！」。一年目は、誰もが必ず通る通学路をテーマに観察を通してデザインを考えた。地域とつながるきっかけは、観察から生まれる違和感など、感情の動きにある。喜び、笑い、苛立ち、困惑など、心が揺さぶられたとき、観察対象が自分事になり、そこに心の動きを伴う対象とのつながりができる。この学びを踏まえ、今年度は「笑い」という複雑な感情をテーマに掲げ、日常にある多様な笑いの観察から始めた。

昨年度から変えたことの一つに、応募対象を2〜3人のチームに限定したことがある。これまでは2人以上のチームを対象としてきたが、5人以上になるとメンバー全員が集まるだけでも大変でコミュニケーション量・質ともに下がり、学びも活動も深まらない。そこでチームの人数を制限して応募した結果、計14チームが採択された。

はじめての集中ワークショップで受講生と顔を合わせたときの様子が忘れられない。同じクラスや部活で集まったチーム、事前説明会で声をかけて高校生と社会人がペアになったチーム、どうしても参加したくて友だちにお願いをしてできたチームなど、チームの生まれ方はそれぞれ。ワークショップではチームを離れて、他のチームと交流する時間をとった。他校からの参加者とコミュニケーションを楽しんでいるチームがあるなかで、同じ学校内のメンバーだけで集まり離れられないでいるチームもある。そこには人の個性と同じくらい、チームの個性もはっきりと見えてくる。

チームは人のことだから、仲良くもなるし悪くもなる。あるチームは友だちを誘ってメンバーが増え、あるチームは最終的に一人になってしまったり、ほぼ解散しそうにもなった。音楽の方向性の違いでバンドが解散するように、一人一人が思いをもった人間だ。チームの変化をしっかり受け止め、気持ちに向き合い選択を尊重できたことは、本事業の大切な価値だと思う。

地域が人の集まりだとすると、地域とつながる最初の一歩は人と人がつながることからはじまる。学校でも会社でも町内会でも、人と人は共にいる。人と人がつながるとき、そこには無限の可能性がある一方で、互いを大切にしながら関係を続けるのは困難でもある。半年間を駆け抜けたすべてのチームが共に過ごした時間に感謝しつつ、世界のどの人同士も平和にいることを願ってやまない。

一般社団法人ドチャベンジャーズ
**柳澤 龍**